

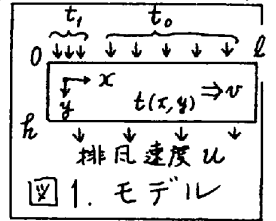
(48)

焼結炉の温度分布特性

名工大 材研 ○森山 昭 荒木和男

I. 緒言 従来、非等温固定層非触媒反応操作の理論は、反応速度を一定とした van Deemter<sup>1)</sup>、等温条件下で物質収支式を解き、熱収支式に適用する Johnson<sup>2)</sup> の解析、および、最近、熱収支式のみに着目した Block<sup>3)</sup> の焼結炉の解析などがみられるが、いまだ確実な知見は得られないようである。

ここでは、焼結炉の温度分布特性を知る目的で、気固間温度差無視、ガス押出し流れを仮定して、解析を試みた。反応として、コークス燃焼反応に着目する。



II. 解析と結果 層内で熱の発生がない場合の基礎式は、定常条件下で、

κ(1+m)∂φ/∂y + ∂φ/∂z = 0 (1) . χ = y - κ(1+m)z ; z = z の変換と点火

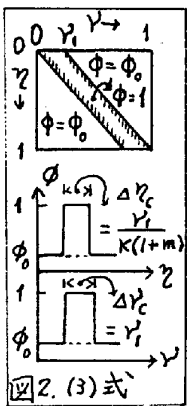
炉操作を基礎式に考慮して、(1)式は、 ∂φ/∂z = {U(x) - U(x-y) + φ\_0 U(x-y)} δ(z) (2)

∴ φ(z, x) = {U(x) - U(x-y) + φ\_0 U(x-y)} (3) , U(x), δ(z): ステップおよびデルタ関数。

(3)式に基づき層内温度分布は図2のようになり、次の各条件が得られる。

(理想的操作): κ(1+m) = 1 - γ\_1 ; (炉長を無駄にする操作): κ(1+m) < 1 - γ\_1 ;

(炉長が不足する操作): κ(1+m) > 1 - γ\_1 (4) . この場合、一般にガスと



固体の温度に差があると考えると、(1)式の代りに、

κ∂φ\_g/∂y + ∂φ\_g/∂z + mN(φ\_g - φ\_s) = 0 ; ∂φ\_s/∂y - (N/κ)(φ\_g - φ\_s) = 0 (5)

φ\_g(z, 0) = φ\_s(z, 0) = 0 ; φ\_g(0, y) = U(y) - U(y - γ\_1) の条件で(5)式の解を得

た。この解から、N ~ 1, m ~ 10^4, κ ~ 10^-4, γ\_1 ~ 0.05 の通常操作条件

下で φ\_g と φ\_s はほぼ等しく、気固等温の反応は妥当であること

がわかる。N の値を実際値に比較してきわめて小さく (κ と

之は、10^-3) とすると層内の粒子温度分布は図3のよう

になる。この場合でも温度の峰の軌跡は、N = ∞ の図2の場合

と同様になり、(4)式の条件がほぼ成り立つ。コークスの反応速度

を Johnson<sup>2)</sup> と同様に、 R\_c^\* = R\_w\_0(1-f)C (6) の形とし、まず、f = f\_a, C = C\_a の適当

な平均値を採用すると、κ(1+m)∂φ/∂y + ∂φ/∂z = κHmλ\_0 e^{-A/φ} (1-f\_a) S\_a (6)'. 解は、χ = 一定

の条件で ∫\_0^{φ(z,x)} e^{A/φ'} dφ' = κHmλ\_0(1-f\_a) S\_a z, 0 < χ < γ\_1 ; ∫\_{φ\_0}^{φ(z,x)} e^{A/φ'} dφ' = κHmλ\_0(1-f\_a) S\_a z, χ > γ\_1 (7)

(7)から図4が得られる。また、(6)式で O\_2 濃度 C のみを C\_a と与えよと、基礎式は、

∂f/∂x = λ\_0 e^{-A/φ} (1-f) S\_a (8), ∂φ/∂z = κHmλ\_0 e^{-A/φ} (1-f) S\_a (9) .

(9)より (1-f) = ∂/∂z { ∫\_0^A e^{A'/φ'} dφ' / κHmλ\_0 S\_a } (10). (10)をχで微

分して(8)に代入すると、-∂φ/∂z = ∂^2/∂z^2 { ∫\_0^A e^{A'/φ'} dφ' / λ\_0 S\_a } (11)

点火炉操作を考慮してzで積分し、ついでχで積分すると、

λ\_0 S\_a χ = ∫\_{φ(z,0)}^{φ(z,x)} e^{A/φ'} / (1-φ') dφ', 0 < χ < γ\_1 ; λ\_0 S\_a (x - γ\_1) = ∫\_{φ(z,γ\_1)}^{φ(z,x)} e^{A/φ'} / (1-φ') dφ', χ > γ\_1 (12), (13) .

両式のφ(z, 0), φ(z, γ\_1)が問題であるが、f(z, 0) ≡ 0を仮定し、(9)より ∫\_0^A e^{A'/φ'} dφ' = κHmλ\_0 S\_a z (14) . また、(13)から

のφ(z, γ\_1)に基づき、φ(z, γ\_1) = φ(z, γ\_1) - (1-φ\_0) (15) を仮定

する。図5から、φがzとともに増加し、γとともに減少し、

ここでも(4)式の条件があてはまるようにみえる。[記号] b: 壱輪係数, C\_g, C\_s: 比熱, f: 反応率, w\_0: 炭素濃度, ε: 空焚率, ρ\_g, ρ\_s: 密度 H = W/(dH)

(1-ε)ρ\_s C\_s, m = (1-ε)C\_s ρ\_s / ε C\_g ρ\_g, N = R R\_p / (u(1-ε)C\_s ρ\_s), S = C\_0 q\_0, η = 3/8 R, κ = R V / u ε, λ = R C\_0 / V, γ = x / ε, φ = x / [x\_0]

1) J. van Deemter: Ind. Eng. Chem., 45, 1227 (1953); 2) B. M. Johnson, F. F. Froment, C. C. Watson: CES, 17, 835 (1962); 3) F. R. Block: Archiv Eisenhüttenw., 43, 93 (1972)

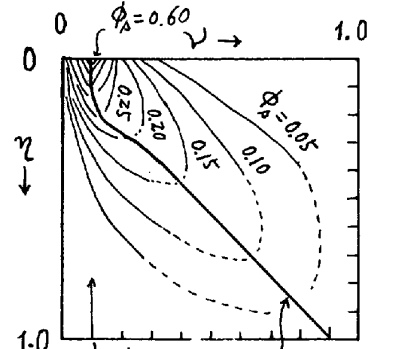


図3. 層内等温線 (計算結果)

(m = 10^4, κ = 9(10)^-5, N = 10^-3)

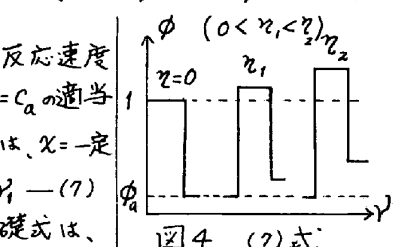


図4. (7)式

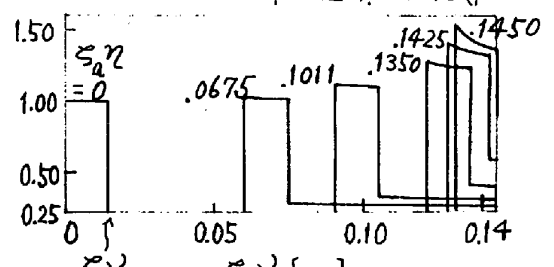


図5. C = C\_a: 一定としたときの層内温度分布 (A = 15, H = 2.5, m = 10^4, κ = 9(10)^-5, λ\_0 = 8(10)^5, γ\_1 = 0.1)